（短報）

空間・社会・地理思想 21 号，49-51 頁，2018 年
Space, Society and Geographical Thought

石井素介先生を偲ぶ
――日独地理学会の思い出と本誌へのご寄稿――

水内　俊雄 *

Toshio MIZUUCHI
In Memoriam: Remembering the Emeritus Professor Motosuke Ishii;
My Acknowledgment of His Contribution of research Papers to This Journal and the Japan-German Geographers' Group

はじめに

この原稿は、2017年3月24日に逝去された石井素介先生を偲ぶ会が発刊した小冊子に、寄稿予定であった文章である。わたしの手違いで、別の原稿「「2013年夏の病床記録」より―病状経過と人体の健康快復力から新「資源論」について考える　石井素介記―」を送付し、小冊子に掲載された。結果的には、この先生の文章の価値ははるかに高いものであり、活字化して残されたことで、先生もお悦びではないかとひそかに思っている。このたび編集者とご遺族の了解を得て、本来寄稿予定であった原稿を本誌に掲載させていただくものである。本誌にも数多くご寄稿いただき、この文章をもって先生へのお礼とする。

日独地理学会への先生の思い

研究上、ドイツでの調査の関わりは、寺阪昭信先生代表のトルコ調査科研の中で、トルコから欧州に移民、出稼ぎという形でベルリンに形成されたトルコ人集住地区を最初に訪れた1992年のことであった。以降3年ほど、内藤正典先生や山本健児先生のドイツでの調査に同道したが、ドイツに関して未だ何も論文化したことはない。ただ機縁というか、このドイツ初訪問より4年前、金田章裕先生からの依頼で、1988年の第6回日独地理学会議後のエクスカーションを、当時赴任していた九州大学の助手として、北九州でさせていただいたことが、石井素介先生と間近に接する最初の機会となった。

鮮烈な思い出は、浮田典良先生と石井先生のドイツ語での通訳の堪能さであり、またその博識にあった。畏敬の念をもって身近にさせていただくことができたのであった。以降このご縁で、1992年ドイツで開催された第7回から、2009年の第10回まで、本会議や巡検に参加することになり、確か第9回までは、石井先生とはお会いしていたように記憶する。

この誌の性格を鑑み、私信であるが、第10回を神戸大で主催した大城直樹さんへの、2009年10月23日の石井先生からのメールを、下記に掲載する。石井先生のこの会に対しての思いを共有しておきたい。なお以下のメールは、大城さんが実行委員会に回覧したものを転載している。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日独地理学会議の開催について、わざわざお報せをいただき、有難うございました。

ただ、私自身は、近年老齢化にともなって次第に学会等の諸会合に出席するのが困難になってまいりました。来春、大阪と和歌山で開催される会議と巡検は、私にとっても大いに興味のある機会ではありますが、やはり出席は無理と思われますので、失礼させていただきます。心から会議のご盛会と無事ご成功のほどをお祈りしています。

思い出してみますと、1988年名古屋で開かれた第６回日独地理学会議の際、その直前に逝去されたこの会議創立以来の功労者ペーター・シェラー氏に対する賞状の中に、以前から同氏が繰り返し語っていたことで、現地討議を重視するこの会議のねらいについての短い言葉が挙げられていたことは、当時の参加者の方々ならばきっと覚えておられるでしょう。以下の通りです。

「我等の会議は、外国のものごとをより良く理解し、価値付け、位置づけが出来るようになると同時に、自国のことや熟知している（はずの）ものごとを、他者の光で照らし出させてみる、という目標に奉仕するのだ」と。

＊　大阪市立大学

Unsere Konferenzen dienen dem Ziel, Fremdes besser verstehen, bewerten und einordnen zu koennen sowie Eigenes und Vertrautes in anderem Licht erscheinen zu lassen. (Bochumer GA 50, S.23)

このことの趣旨を、ご参会の若い仲間の方々に、ぜひともよろしくお伝え下さるよう

お願いいたします。

石井素介

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

戦時戦後の東大地理学

この日独地理学会での先生との道中でのお話を聞く中で、わたしのひとつの関心事であった、戦時の地政学への関心の中で、東京大学地理学の戦争との関りを断片的に触れることができた。これは、野澤秀樹先生のもとで助手としてお手伝いした1985年からの地理思想科研との出会いで、竹内啓一先生のご発表や夜の懇親の場でのいただいた会話から、第2次世界大戦と地理学との関わりへの関心が生じたことに端を発する。そしてその後私がかかわってきた『空間・社会・地理思想』誌での、先生からのご寄稿につながることになった。

京都大学地理学の地政学参与への後遺症で、斯学がタブー視されていた現状を、事実や資料確認のもとに改善したいという意識は、水津一朗先生とのゼミ後の懇親の場で持たざるを得なかった。ではかたや、当時の東京大学の地理学はどうだったのか。この関心は石井先生との出会いで、先生の膨大な当時のインフォメーションをいただくことで、醸成された。貴重なアーカイブとして、本誌への掲載につなぐことができたことを、密かに自負している。

石井先生の『空間・社会・地理思想史』へのご寄稿は、下記のとおりであり、機関レポジトリーとして公開されているので、ダウンロードしてお読みいただける。

▷回想 三河(さんが)紀行素描--戦時下の旧北満辺境調査旅行日誌、5号、2000年
▷カール・ハウスホーファーと日本の地政学--第一次世界大戦後の日独関係の中でハウスホーファーのもつ意義について(C.スパング著、翻訳)、6号、2001年
▷戦時下における地理学の軍部との協力について--終戦前後の参謀本部「研究動員学徒」時代の回想から、13号、2010年
▷大震災を機に「災害論」の見直しを考える : 災害論をめぐる「環境論」・「資源論」文献の渉猟、15号, 2012年

特に、最初のご寄稿であった三河紀行については、1944年秋から1945年初頭にかけての当時の満州からソ連国境地帯の詳細な描写に加えて、当時の東京大学地理学の演習や授業内容を知るに至り、私にとっては衝撃的な文章であったことを覚えている。残念ながら当時の石井先生とのやりとりは残っていない。

戦後の資源論への展開

上記の2012年のご寄稿後も、新たな論考をいただく予定となった。特に資源論に対する先生の一連のご研究のなかで、後に「経済地理学年報」60巻-1、2014年掲載の、「「資源論」の新構想へ向けての課題 : 書評に代えての覚え書」として掲載された、その原稿を事前にお送りいただいたときの私のお礼のメールを紹介しておきたい。2013年12月20日に発信したものである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

石井先生

水内でございます。ご玉稿を送付いただきまして、感謝にたえません。

中藤先生の本をいただきながら、読んでいない恥をさらけ出すようですが、先生の「書評」は、たいへん刺戟的でした。一点は、資源調査会が設立されたころの、大陸帰りの研究者や実践家の島国日本を越えたスケール感の中での資源論の展開のダイナミクスさ、2点目に、当時襲った度重なる災害への対応からのどうも日本的な資源感が、内国的にドメスティックに形成されていた過程、この二つの流れが、後者のほうにどのように、収束していったのか、知の展開が大変興味深いものに思われました。それが国土計画にどのような影響を与えたか、あたりです。そして3点目に、情報と資源の関係をするどく指摘されているところですが、わたしもセーフティネットを論じるときに、地域資源という表現を、理論的なフレームワークを気にせずに、安易につかっていますが、たしかにこの資源は、情報が行きかい、そのインフラとしてのネットワークから形成されているのですから、情報なのですね。地域資源、社会資源をマルクスまでさかのぼり、検討する頭脳を有しておらないのですが、ぼくも後進に託したいと思っております。

先生のほうで、空間社会地理思想にご寄稿いただく原稿がもし眠っておられましたら、またご教示

たまわれば幸いです。もう年の瀬となりましたが、よいお年をおむかえなさることをお祈り申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

年末のこのメールをやりとりした前の同年夏に、先生は入院されていた。退院後の11月6日に下記のメールをいただいていた。一部を記する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・・ワープロを打つ程度の元気は取り戻すことができたので、さしあたり今夏の約二か月半の入院中の病状の経過、ならびに病床で考えたことなどをまとめて、短文の「病床の記録」を作成しました。これは友人の方々へのほんの経過報告の意味で書いたものです。添付資料にしてお送りしますので、ご笑覧くだされば幸いです。

なお、貴兄には文末に記した「資源論」のアイデアについて書き上げてから、原稿としてお送りするつもりでいたのですが、まだまだ考えることが重層し錯綜を重ねている最中で、もっと時間がかかりそうな状況ですので、取りあえず退院・快気のご挨拶という意味で、この「病床の記録」をお送りする次第です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この「病床の記録」は、私の手違いもあったが偲ぶ回の冊子で、公開されることとなった。6300字強のお原稿の末尾の文章は、次原稿への展開を考えられていた中で、示唆的な内容となっている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・・以上に述べてきたのは、長い病床生活の中で頭に浮かんだ妄想に類する考察に過ぎない。ここで導き出される一応の結論は、次のようなアイデアになる。

すなわち、『生きている人間の肉体(＝自然そのもの)には、病気(＝自然の災い)というリスクの素が潜んでいて時々暴れ出すことがあるが、医療(＝科学技術)という人間の智恵が人体の具備する健康快復力(＝自然の恵み)という「資源」の活性化をバランス良く図れば、病気克服を達成する可能性が生まれてくる』ということになる。

だがこのアイデアは、日常用語の「資源」の持つ常識的な意味とは、なお余りにも距離があり過ぎるので、おそらくすぐには理解され難いであろう。そこでこの新しい「資源論」の考え方については、別途、その内容の展開を試みたいと考えている。

2013年10月末日、石井素介記。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

上記の経済地理学年報でのフォーラム原稿が公刊される直前に、これは先生との最後のものとなった2014年4月26日のメールでは、以下のようにいくつかの論考を、資源論のさらなる展開として添付していただいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・・その後、友人の河川工学者高橋裕氏から、同氏が会長を務める旧科学技術庁の外郭団体が「資源調査会を再評価する報告書」を出すことになったので、それへの原稿を頼むと依頼され、短文を書きました。その中で、歴史的経過とは別に、当時この会での活動の中から独特の「資源観」 が産み出されたことを後半で取り上げたのですが、この点についてもう少し検討を重ねた上で、上記の「資源論」の継続としての展開を試みてみようと考えて、高橋氏の方には「この報告原稿の後半部については他の雑誌論文に転用させてもらう」旨の諒解を求めました。そしてこれができたら「空間・社会・地理思想」誌に投稿しようと考えていたのですが、これはやはりすぐには無理な話で、もう一年がかりで来年度を目標とする仕事として努力してみようと考えています。

この「資源論」を改めて考えてみようというアイデアは、「現代日本の資源問題」の書評依頼がきっかけになったのですが、長期入院時の病床体験も重要なヒントを与えてくれたので、退院後見舞いに来てくれた若い友人たちに配布する短文 (未公刊) を書きました。参考までに前記改稿部分表示原稿、高橋氏への原稿と共に、添付資料としてお送りします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

紙数は尽きたが、石井先生とのやりとりを、ご許可なくいろいろ転載させていただいたご無礼をお許しいただきたい。思いは、石井先生とのやりとりをアーカイブとして読者の皆様と共有させていただきたい、というところにある。先生のご健筆に感謝申し上げるとともに、鬼籍に入られた先生との思い出を、したためさせていただいた次第である。

2017年6月8日　記